

このことは史記には見えず、前漢書西域傳に初めて記されて居ることである。後漢書西域傳にもこれを受けて五翽侯の名を擧げて居るが、たゞその中の高附は變へられて都密と記されて居る。またその他にもこの一節について兩書の間的重要なる相違のあることは後に述べる通りである。さて

貴霜翽侯の丘就卻といふ人の時代になつて、他の四翽侯を滅ぼして自から貴霜王と號し、更に安息即ちパルチヤを始め傍近諸國を併有し、その子閻膏珍の時代にまた天竺を滅ぼして益々富盛となつた。諸國では皆これを貴霜王といふが、漢ではその故號に因んで大月氏と言ふのである。

これは後漢書の西域傳に初めて見えることである。後漢書には勿論この以外に前漢書を踏襲した記事があるが、その中特に注意すべきことは、大月氏の都を藍氏城と書いて居ることである。

私の今述べようとする問題について、三史の中から極めて緊要な事項だけを抽出すると略ぼ以上述べた如くである。其の他のことについては漸次引用して行く積りである。後漢書に記して居る貴霜王家の丘就卻・閻膏珍^①ペリオ氏は近く卻は却の誤寫、珍は彌の誤寫であらうと説いて居る^②の後に佛教界の大立物であるカニシユカ王及びその後嗣數代が續いたことは、クシヤン即ち貴霜の貨幣の研究の如きを基として、今日よく知られて居ることであるが、支那の正史にはその次第を載せて居らず、カニシユカ王の名の如きも、佛典の中に大月氏の迦膩色迦王として記されて居るに止るのである。

さて以上の事實は周知のことであるとして、然らば迦膩色迦王の如きを始めとして、所謂貴霜王家といふものは漢の西邊に據つて居つた月氏の系統に出て居るものであるかどうか。後漢書の記事に據ると西方諸國で貴霜即ちク